

歳時記のある暮らし

二〇二六年

《八月》

ひまわりの花が元気に咲くころとなりました。

皆様、健やかに過ごしてでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

八月は旧暦で「葉月(はづき)」。葉が落ちはじめ「葉落ち月」や、稲の穂が張る「穂張り月」などが語源といわれ、移ろう季節の気配がうかがえる名です。照りつける太陽や立ちのぼる入道雲という夏の体感を残しつつ、虫の気配が夜の風に混じりはじめ、盛夏から初秋へ向かうゆるやかな転換が確かに息づいています。

七日は立秋で初候は「涼風至(すずかぜいたる)」。秋のはじまりとされながら現実には夏の盛りですが、早朝のわずかな風や夕方の日影の伸びに気づきはじめます。

帰省や墓参りで人の移動が増えるころ。各地で夏祭りや花火大会が開かれます。音と光に包まれながら夜空に咲いては消える花火を見上げるひとときは、この季節ならではの楽しみです。花火大会のはじまりは、享保十八年(一七三三年)隅田川で行われた水神祭にさかのぼると伝えられています。飢饉や疫病によって多くの人が命を落とした時代、亡き人を弔い、悪疫退散を願って打ち上げられたのがはじまりです。夜空に放たれた光は人々の祈りを託した鎮魂のしるしだったのです。

やがて花火は川開きの恒例行事となり、華やかさを好む江戸の庶民にも受け入れられ、「玉屋」「鍵屋」といった花火師たちが腕を競うようになります。花火は次第に亡き人を弔う供養の光から、夏を楽しむ行楽の光へと姿を変えていきました。

花火大会は人々にとって身近な楽しみとなり、夏の風物詩として愛され続けています。花火の魅力は、小さな火種が空に放たれた途端、ぱっと大きな花となって夜空を彩り、やがて静かに消えていくという、はかなさと美しさにあります。

わらい

金子 みずん

それはきれいな薔薇いろで、芥子つぶよりからいさくて、

(裏へ続きます)

『神秘の健康力』

定期購入 30粒 2,700円(税込)～

商品の注文・変更をご希望の場合は、下記にお電話ください。

☎0120-63-2222

※おかけ間違いにご注意ください。

【営業時間】

9:00～18:00 (12/31～1/2は休日)



こぼれて土に落ちたとき、ぱっと花火がはじけるように、
おおきな花がひらくのよ。

もしも涙がこぼれるように、こんな笑いがこぼれたら、
どんなに、どんなに、きれいでしよう。

みずっぱは「笑いの粒」というものがあり、それは菫薇色で芥子粒よりも小さいけれど、地に落ちた瞬間、花火のようにはじけて大きな花を咲かせる。そんな世界を思い描いています。つらいことや悲しいことにこみ上げる涙が、もしも笑いの粒となってこぼれ、夜空にきらめく打ち上げ花火のように一輪の大きな花を咲かせたなら、どんなに素晴らしいでしょう。花火を見上げるひとときが、忙しさの中で心にたまった重さを解き放ち、心を整える時間となるならば、八月の夜空にひらく一輪の光の花は、健やかに夏を乗り切るための心身の養生につながります。

八月中旬はお盆の時季ならではの時間が流れます。関東や東日本、中部地方では、精霊馬(きゅうし)と精霊牛(なす)を飾り、ご先祖様が行きは早く、帰りはゆっくりと行き来できらう願いを込めます。京都では、「あの世まで響く」といわれる六道珍皇寺の迎え鐘でご先祖様を迎え、五山の送り火で再び見送ります。

立秋から処暑へと移りますが、強い日差しと湿気、夜になっても下がらぬ気温に眠りが浅くなり、気力が続かない日も増えます。室内では適切な温度管理のために冷房を活用しながら、こまめに水分を補給して熱中症を予防しましょう。無理に何かをしようとせず、身体の声に耳を傾け養生に専念することが、厳しい暑さを乗り越える知恵となるでしょう。

健康対策には『神秘の健康力』。商品のご注文やご変更などございましたらいつでも(0120-1631222)までご連絡ください。

皆様のご健康をお祈り申し上げます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当 久郷 直子

